科 目 名	応用言語学特殊講義
担当教員	Phillip R. Morrow

● Course description:

Applied linguistics is concerned with applying the results of linguistic research to decision-making in the real world. There are many areas in which linguistic research is relevant to real-world issues, and thus the scope of applied linguistics is broad and encompasses many diverse but related areas. Applied linguistics was originally associated with language teaching and learning, however it is also related to such areas as business communication, language policy and planning, translation, lexicography, institutional discourse, medical communication, discourse analysis among others. In this course, students will become acquainted with how linguistic research has been used in these areas through readings from *The Routledge Handbook of Applied Linguistics*. This handbook is composed of 47 chapters, each of which deals with one area that is germane to applied linguistics. As there is not time to cover all of the chapters and areas, the instructor will make a plan together with the students about which chapters and topics to cover. As a goal of the course is for students to gain a broad understanding of the field of applied linguistics, the course will concentrate on areas of particular interest or areas with which the student is unfamiliar.

● Main Goals of the Course

The main goal of the course is for students to gain a basic understanding of some of the many areas in which linguistic research is put to use. This entails learning about different types of linguistic research, what kinds of results can be obtained from them and how those results can be used.

● Course schedule:

This is a one-year (two-semester) course. At the start of the course, the instructor and students will plan together and select 15 chapters to cover for the first semester. At the beginning of the second semester, the instructor and students will make a plan for covering 15 more chapters.

Assignments and due dates

For each chapter the student will write a short (250-500 word) review of main points or selected points from the chapter. The review will include summary and discussion of those points. Students should complete 15 reviews each semester. In the first semester, 3 reviews should be submitted by the end of April, and 4 reviews in

May, June and July. In the second semester, students should submit 4 reviews in October, November, December and 3 reviews in January.

- **Examination**

No examination.

- **Preparation and Review:**

Students should expect to read one chapter (around 15 pages) and write a review each week during the semester. Students may be asked to revise or rewrite the reviews in some cases.

- **Textbook**

The Routledge Handbook of Applied Linguistics (ed. James Simpson)

- **References**

References to textbooks and research articles can be provided for the students' areas of interest.

- **Evaluation:**

Based on the quality of the weekly reviews.

科 目 名	日英語意味論特殊講義
担当教員	今仁（いまに） 生美（いくみ）

● **講義概要**

この講義では、日本語あるいは英語の意味論的研究を行う際に必要となる意味論の一般的な概念を学び、さらにそれら概念の深い理解を得ることで、論理学などの形式的な手法を用いた論文を自力で読めるだけでなく、その手法を用いて意味的な分析を自ら行うことができる能力を獲得することを目的とする。具体的には、Henriette de Swart (1998) *Introduction to Natural Language Semantics*, CSLI Publicationなどをテキストとして用い、理論的な内容を理解するだけでなく、実際にこれら二つのテキストに所収の Exercises も解いていくことで技術的な能力も身につけていく。

この講義には以下の項目が含まれている。(1) 意味一般、(2) 意味理論の構成（語彙レベルの意味 vs. 文レベルの意味（構成性原理、対象言語、メタ言語）、(3) 論理学の手法を用いた言語分析（命題論理、一階述語論理、論理演算子）、(4) 量化（一般量化子理論、限定詞、総称文、単調性）、(5) スコープおよび照応現象、(6) テキストの動性（動的意味論）、(7) 時制と様相（時制論理、様相論理）。

この講義は、レポートおよび在宅試験の二つから成る。在宅試験は、レポートの内容が合格と判定された後に受けることができる。成績の評価は、レポートが50％、在宅試験が50％で行う。

● **学修到達目標**

形式意味論の理論的な基礎を身につけ、かつ、形式意味論の研究に必要な論理学の素養も身につけることを到達目標とする。

①学修を進めるうえで重要なポイント

数学的な側面が強いので、ゆっくりと丁寧に読み進めることが重要である。

②課題の取り組み方

「分からない」と感じた箇所がもっとも重要な部分であることが多いので、そういった箇所は読み飛ばさず、きちんと理解してから読み進めていってほしい。

● **事前事後学習**

事前学習として、なるべく集合や関数といった数学上の基本概念について学んでおいてほしい。事後学習としては、理解しきれなかった概念や理論について参考書などを参考にしてきちんと把握しておくこと。

● **課題とレポート提出期限**

課題およびレポート提出期限については、追って知らせる。

● **試験**

在宅試験は、レポートの内容が合格と判定された後に受けることができる。

●　指定教材

Henriette de Swart (1998) *Introduction to Natural Language Semantics*, CSLI Publications.

このテキストは、de Swart が若いころ書いた意味論の入門書である。入門書とはいえ、意味論の基本的な概念および難解な部分が非常に分かりやすく書かれている良書である。英語が対象となっているが、日本語にも応用できる内容を持つ。在宅試験は、本書の内容を日本語に応用した問題も出す予定である。レポートは、英語あるいは日本語のデータを用いて書き上げることになる。

1.　意味の理論

1 章と 2 章では、一般的な意味論の枠組みが説明されている。言語理論の中での意味論の位置づけはどのようなものなのか、そして、意味理論における基本的な仮説は何かを理解することが求められる。

2.　論理演算子と真理条件

3 章では、命題論理の全容が解説されている。形式意味論で実際に用いられるのは 4 章で解説されている一階述語論理であるが、一階述語論理は命題論理を基礎としているため、この章をしっかりと理解しておくことが必要である。自然言語の文を命題論理式に変換することができ、かつ、真理値計算ができるようになることが求められる。なお、命題論理は、統語部門と意味部門から形成される点に注意すること。ここには、意味とは、記号に対象が結び付けられて初めて生じるという仕組み（関数的な働きがここにはある）が反映されている。このテキストでは論理学の事前の知識は要求されておらず、丁寧に読み進めていけば理解できる構成を取っている。

3.　一階述語論理

4 章は、一階述語論理を解説したものである。モデル理論的な考え方が強く反映されており、この点をよく理解することが重要である。この章には非常に重要な内容が盛り込まれているため丁寧に読み進めてほしい。

4.　照応と量化

6, 7, 8 章では、照応と量化が取り上げられている。形式意味論は、量化（some や every、most のような限定詞の研究）により飛躍的に発展した。したがって、この章では、意味論がどのように理論的に精緻化されていったかを学ぶことができる。また、動的意味論と呼ばれる意味論の先端研究の枠組みも紹介されている。内容的に多少難しくなっているが、読み飛ばすことなく一歩ずつ読み進めることを勧める。

5.　時制と様相

8 章は、時制と様相に関して解説したものである。意味論ではこれらは時制論理と様相論理によって分析されるのであるが、この章ではその簡単な手ほどきがなされている。基本的には一階述語論理の延長とみなせる分野であるので、4 章が理解できていればさほど難しくはない。

●　参考文献

1. 金水敏・今仁生美 (2000)『意味と文脈』岩波書店
2. 戸田山和久 (2000)『論理学を作る』名古屋大学出版会

● **成績評価方法**

成績の評価は、レポートが 50%、在宅試験が 50%で行う。

科 目 名	イギリス文学特殊講義
担当教員	西村（にしむら） 美保（みほ）

● **講義概要**

本講義は、19 世紀を中心として、イギリス文学史とその文化的コンテクストについて講義する。その一方で、文学用語や理論、文学テキストの多様な批評を読んでいくことで、研究の切り口や手法の視野を広げる。

● **学修到達目標**

（1）イギリス文学史及び文化史について理解を深める。
（2）文学作品を読み、分析、評価するための多様な視点、切り口を学ぶ。
（3）研究論文の内容を理解し、分析できるようになる。
（4）多様な研究の在り方を知った上で、独自の視点、アプローチの方法、論じ方を構築するための糸口をつかむ。

● **事前事後学習**

課題レポートを作成するに当たって、どのテキストを扱うかを指導教員と相談し、テキスト及び関連文献を読んでください。

● **課題**

受講生は指定された 2 つの課題について、締め切り日までに課題レポートを提出してください 2 つの課題それぞれ 3～4 ページ（A4、約 4,000 字）になる。課題レポートは CCS を通して提出してください。提出方法については受講決定後に説明します。

(1) Klarer (2024) の 2, 3, 4 を読み、それぞれの章の中から自分の研究分野と関連のあるセクションを取り上げ、その要約と自分の研究テーマとの関連を論じてください。
(2) Stone & Sanders（2021）のイントロダクションを読み、その要約をする。さらに、章の一つを取り上げ、自分の研究分野と関連付けて論じてください。

● **課題図書**

Klarer, Mario. *An Introduction to Literary Studies*. New York: Routledge, 2024.
Stone, Pamela K. & Lise Shapiro Sanders. *Bodies and Lives in Victorian England: Science, Sexuality, and the Affliction of Being Female*. London and New York: Routledge, 2021.

● **課題提出受付期間**

(1) 9 月 23 日から 30 日まで (2) 11 月 23 日から 30 日まで CCS を使って提出してください。

● **事前事後学習**

授業前に配布資料や読んでおくよう指示されたものに目を通しておくこと。授業後は、授業での議論をノートにまとめること。

● **テキスト**

第1回目の授業でアナウンスする。

● **参考資料**

Abrams, M. H. & Geoffrey Galt Harpham, A Glossary of Literary Terms. (Stamford: Cengage Learning, 2015)

Guerin, Wilfred L. , Earle Labor, Lee Morgan, Jeanne C. Reesman, John R. Willingham, *A Handbook of Critical Approaches to Literature*. (Oxford: Oxford University Press, 1992.)

Peters, Laura *Orphan Texts: Victorian Orphans, Culture and Empire.* (Manchester: Manchester University Press, 2000)

テリー・イーグルトン、『文学とは何か　現代批評理論への招待』(上)・(下)大橋洋一訳、岩波文庫、2018

ジョナサン・カラー、『文学理論』荒木映子・富山太佳夫、岩波書店、2003

フランク・レントリッキア、トマス・マクローリン、『現代批評理論　22 の基本概念』大橋洋一他訳、平凡社、1994

その他詳しくは指導の中で紹介する。

● **成績評価方法**

授業での発表・課題等 60%、在宅試験 40%による。

科 目 名	英語教育指導論特殊講義
担当教員	高橋（たかはし） 美由紀（みゆき）

● **講義概要（目的と内容・方法）**

2020 年度から小学校英語は中学年では外国語活動として週1回必修化され、高学年は外国語の教科として週 2 回（1 回=45 分）導入されている。教育内容についても、これまでの「聞くこと」「話すこと（発表・やりとり）」の音声中心で「英語に慣れ親しむ」ことが目標であったものから、「読むこと」「書くこと」も含めた四技能 5 領域の育成及び、「英語を使用して～できる」という明確な目標が掲げられている。また、文部科学省から「目標と評価の一体化」のための参考資料も示された。また、2024 年度から外国語科が他教科に先行して、学習者用デジタル教科書が導入されており、外国語科では、効果的なデジタル教科書の活用法等の研究も始まっている。

この講義では英語教育指導論として、小学校英語教育を取り上げ、上記のことを踏まえて理論的側面と実践的側面から考える。

現在の小学校外国語科の課題となっている小学校英語教育の指導者、指導内容、指導方法、教材＆教具（絵本やデジタル教科書等）、カリキュラム、評価等をはじめとし、中学校・高等学校へ繋がる英語教育のあり方等等について、小学校英語教育の指導論として、小学校英語教育を切り口とすることは意義深いことだと考えられる。

とりわけ、この講義でテーマとするのは、日本の公立小学校における英語教育の在り方に関する次のような問題である。

(1) 小学校英語教育の意義・基本的な理念
(2) 小学校英語教育における効果的な教授法とその実践
(3) 小学校英語教育におけるコミュニケーションを重視した指導法
(4) カリキュラムやプログラム作成
(5) 教材・教具等実践の知識（絵本、デジタル教科書等）
(6) 小学校英語教育における第二言語習得論の役割
(7) 小学校英語教育における評価のあり方
(8) 小学校と中学校の英語教育の連携のあり方

● **学修到達目標**

小学校外国語活動・小学校英語教育の理論と実践について理解し、小学校現場で指導ができることを目標とする。

● **講義計画**

【課題とレポート提出期限】

受講生は指定された上記(1)～(8)から 2 つ選択し、それについて、2025 年 1 月 31 日()までに課題レポートを提出しなくてはならない。課題レポートは英語または日本語で執筆する。2 つの課題それぞれ英文で 3～4 ページ（A4、約 1,600 語）、日本語で同じく 3～4 ページ（A4、約 4,000 字）

になる。課題レポートは大学院事務室宛に提出する。

【試験】
レポートとする。

● 事前事後学習
予習段階で（課題に取り掛かる前に）、「子どもの言語習得」について学習してください。事後学習としては、課題論文を読み進めながら、ノートに要点をまとめていくことです。

● 指定教材
Textbook 1
Curtain, H & C. A. Dahlberg. (2015). Languages and Learners: Making the Match: World Language Instruction in K-8 Classrooms and Beyond (5th Edition) . Boston: Pearson Education.

このテキストは従来から児童英語教育に関して定評のあるものであり、小学校英語教育をはじめとする、いわゆる早期英語教育全般について網羅的に解説したものである。早期英語教育の分野を考える際にはまずこのテキストにあたるべきであろう。このテキストについては次のような点から読んでほしい。

(1) 小学校英語教育の意義について
このテキストは早期英語教育についてその意義についてもていねいに解説しており、認知発達理論、言語教育理論、実践事例研究などの観点から論じている。「意義」というと主観的な意見が幅をきかせる傾向もあるが、客観的な視点から議論を進めることがこのような時代では必要である。
(2) 小学校英語教育におけるコミュニケーション能力の育成とは何か
コミュニケーション能力の養成という課題は日本の英語教育の目標であるが、それを小学校英語教育でどのように考えるかについて、このテキストを通じて考える必要がある。ここでは理論的な側面に加えて、多くの実践例が提示されており、それらが日本の小学校英語教育でどのように利用できるかを考える。また、学習者用デジタル教科書を活用して、コミュニケーションの場面設定、音声指導、文字指導における「個別最適な学び」「協働的な学び」について考察する。
(3) 発達段階に応じた英語教育のカリキュラムの構築
小学校での 6 年間は、児童にとって大きな成長を遂げる期間であるが、それぞれの学年によって発達段階が異なる。これらの発達段階を考慮し、低・中・高学年のそれぞれの英語教育の年間計画および各授業の指導案を構築する必要がある。
(4) 小学校英語教育における評価
小学校英語教育ではどの様な評価の方法があるのか、また、日本の小学校英語教育では評価をどの様にすべきかを考える必要がある。

Textbook 2: Pinter, A. (2006) *Teaching Young language Learners*. Oxford University Press.

このテキストも Textbook 1: Curtain, H & C. A. Dahlberg (2015)と同様に、早期英語教育全般を扱っている。次のような観点から読み進めてほしい。

(1) 早期英語教育の意義を理論的背景から考え事例を挙げる。

(2) 母語の習得、第 2 言語の習得、外国語の習得についてそれぞれの特徴を挙げて、日本の小学校英語教育ではどのようにカリキュラムを立てるべきかを考察する。

(3) 小学校英語教育のカリキュラムとその指導法を、listening, speaking, reading, writing, vocabulary, grammar 等について、具体的にその指導方法や内容を考察する。

とりわけ、学習者用デジタル教科書を活用して、コミュニケーションの場面設定、音声指導、文字指導における「個別最適な学び」「協働的な学び」について考察する。

(4) 小学校英語教育で「学習すること」を教えるにはどうしたらいいか

(5) 小学校英語教育における教材の評価の視点

(6) 小学校英語教育における評価のあり方を日本の「目標と評価の一体化」と比較して考察する

(7) 授業研究の方法をどのように考えるか

Textbook 3: Joan Kang Shin, Joann Crandall. (2013).*Teaching Young Learners English From Theory to Practice*, Heinle & Heinle Pub; International

このテキスト Textbook 1: Curtain, H & C. A. Dahlberg (2015)と同様に、早期英語教育全般を扱っているが、上記2冊の文献よりもどちらかと実践的な指導の知識・理解ができる。次のような観点から読み進めてほしい。

(1)早期英語教育の意義を理論的背景から考え事例を挙げる。

(2) 母語の習得、第 2 言語の習得、外国語の習得についてそれぞれの特徴を挙げて、日本の小学校英語教育ではどのようにカリキュラムを立てるべきかを考察する。

(3)小学校英語教育における実践指導のための教材研究として、日本の教科書と比較しながら考察する。

(4)小学校英語教育のカリキュラムとその指導法を、listening, speaking, reading, writing, vocabulary, grammar 等について、具体的にその指導方法や内容を考察する。

(5)学習者用デジタル教科書を活用して、コミュニケーションの場面設定、音声指導、文字指導における「個別最適な学び」「協働的な学び」について考察する。

(6)小学校英語教育における評価のあり方を日本の「目標と評価の一体化」と比較して考察する

高橋美由紀・柳善和(編)(2011)『新しい小学校英語科教育法』協同出版.

このテキストについては入手困難ゆえ、大学院事務室に連絡して下さい。テキストをお渡し致します。

このテキストは、理論編と実践事例編に分けられている。理論編では、2011 年度から導入された小学校外国語活動について、(1)は 2018 年度学習指導要領の情報とします。

(2)小学校英語教育における学習者の特徴と教授法、言語習得からみた小学校英語教育、(3)小学校英語教育の授業の計画と評価、シラバスの構成、授業の進め方、指導案の書き方、学力評価のあり方、実践編では、(1)教材のいろいろ、(2)国際理解教育、(3)ICT を利用した小学校英語教育、(4)ティーム・ティーチング、(5)音声の指導、(6)聞くこと・話すことの指導について、(7)文字指導とリテラシー、学習者用デジタル教科書の活用、(8)語彙の指導、(9)文法の指導、また、教員の自己研

修のために、(1)小学校で英語を教える教員の資質と養成、(2)英語コミュニケーション能力を向上させるために、小学校と中学校の連携のために、(1)小学校と中学校の連携の進め方、(2)これからの小学校英語教育の発展、についての内容が紹介されている。

これらの内容は、日本の小学校外国語活動の実態や課題について把握できる。このテキストとTextbook 1 および Textbook 2 の内容を組み合わせながら、考察を進めていく。

受講生には、実際の小学校英語教育の理論的な考察をもとにして、実践面でのいくつかの側面を取り上げて実際の指導計画を立案することが求められる。

● **課題図書**

Curtain, H & C. A. Dahlberg. (2010). *Languages and Children: Making the Match(4th).* Boston: Pearson Education.

Pinter, A. (2006) *Teaching Young language Learners*. Oxford University Press.

Joan Kang Shin, Joann Crandall. (2013). *Teaching Young Learners English From Theory to Practice ,* Heinle & Heinle Pub; International

高橋美由紀・柳善和（編）(2011)『新しい小学校英語科教育法』協同出版、**このテキストについては入手困難ゆえ、大学院事務室に連絡して下さい。テキストをお渡し致します。**

● **参考文献**

高橋美由紀・柳善和（編著）(2015)『小学校英語教育―授業づくりのポイント』ジアース教育新社

小学校外国語科の教科書（2024）及び、学習者用デジタル教科書 *Here We Go !*（光村図書）等

● **成績評価方法**

レポート

科 目 名	後期研究指導 Seminar
担当教員	今仁（いまに） 生美（いくみ）

● Course Description

This course is designed to give directions for research to doctoral students with an interest in general or formal semantics of English or Japanese. Students registered this course must conduct a research project in consultation with the thesis advisor. They must complete a thesis according to the graduate school regulations, and successfully defend it, and finally the thesis must be presented and approved by the committee in the third year.

Students are expected to have in-depth knowledge in the major areas of semantics (and also a basic knowledge of logics that is often used to analyze semantic data and build theoretical frameworks), and become familiar with current research issues in the fields of formal or general semantics, and the current trends in semantics theories in natural languages.

The coursework consists of class attendance called 'schooling' and written reports. Schooling is scheduled four times a year in the first and second years and two times in the third year. Each schooling session consists of four class hours, and sessions are scheduled in April, August, December and February of each year. The details of the schooling will be announced by the Graduate Office.

The following areas will be covered in the schooling: (1) the basic technique of using logics (including a set theory and a model theory) as a tool for semantics; (2) semantic concepts such as anaphora, quantification, monotonicity and tense; (3) current research issues such as negation, negative polarity, generalized quantifiers, dynamic bindings and scope/focus problems and (4) thesis writing on specific issues in English phonetics and phonology.

Specific topics for the schoolings will be given by the thesis advisor in due course, and the students are required to read the materials specified by the advisor before the schooling sessions.

Students are expected to read all the materials assigned by the advisor. There will be no regular lectures in this course except schooling: students are expected to do research on their own in accordance with the instructions given by the advisor. Any questions on this course should be submitted to the graduate office through e-mail or postal mail and will be answered by the advisor.

● The Main Goals of Course

At the end of this course, a student should be equipped with an advanced knowledge of formal semantics and logic, and to have a skill of discussing or analyzing a wide

range of semantic data.

● **Course Schedule**

Students are required to turn in one each research report on the topics of their own research conducted in the first and second years. The report may be written in either English or Japanese, using A4 size paper: 36 lines/page, 80 characters/line (Font: Times or Times New Roman, 10.5 point), 12 – 13 pages (around 5,000 words) in English; or 36 lines/page (Font: Mincho-type, 10.5 point), 40 Japanese characters/line, 7 - 8 pages (around 8,000 Japanese characters) in Japanese. The report should be turned in to the Graduate Office by the specified date and must be approved by the advisor. If the paper is evaluated as unsatisfactory, they have to revise and submit it again for approval.

Students are required to present a paper at national-level academic conference at least one time either in the second or third year of their research. They must prepare and present the paper under the directions of their thesis advisor. Further, they are required to contribute their own paper(s) to the university-funded research journal and/or academic research journal(s).

● **Preparation and Review**

As preparations for schooling, students should consider or try to solve problems that their themes bring about. After schooling, they are expected to deepen their analyses, based on what they discuss in schooling class.

● **Required Textbooks**

・ 金水敏・今仁生美（2000）『意味と文脈』岩波書店

● **References**

Students are expected to prepare a reading plan in consultation with the advisor. The following list is for gaining the general idea of general or formal semantics in natural languages.

・ 赤間世紀（1998）『自然言語・意味論・論理』共立出版
・ Barbara, P and A. Meulren, R. Wall. (1990) *Mathematical Methods in Linguistics*. Kluwer Academic Publishers.
・ Barwise, J and J. Perry. (1981) *Situations and Attitudes*. The MIT Press. 土屋俊他訳『状況と態度』(1983)　産業図書
・ Chierchia, G. (1995) *Dynamics of Meaning: Anaphora, Presupposition, and the Theory of Grammar*. The University of Chicago Press.
・ Chierchia, G and S. McConnell-Ginet. (1990)　*Meaning and Grammar: An Introduction to Semantics.* The MIT Press.
・ Davis, S and B. Gillon (2004)　*Semantics*. Oxford University Press.

- Dowty, D, R. Wall, S. Peters. (1981) *Introduction to Montague Semantics.* Reidel Dordrecht, 井口他訳『モンタギュー意味論入門』(1987) 三修社
- Gamut, L.T.E. (1991) *Logic, Language, and Meaning* I, II. The University of Chicago Press.
- Gorbes, G. (1994) *Modern Logic: A text in Elementary Symbolic Logics.* Oxford University Press.
- 郡司隆男 (1987)『自然言語の文法理論』産業図書
- Huges, G and J. Cresswell. (1968) *An introduction to Modal Logic.* Methuen, London, 三浦他訳『様相論理入門』(1981) 恒星社厚生閣
- Lappin, S. (1996) *Handbook of Contemporary Semantic Theory.* Blackwell Publishers.
- Portner, P and B. Partee. (2002) *Formal Semantics.* Blackwell Publishers.
- 白井賢一郎 (1985)『形式意味論入門』産業図書
- 白井賢一郎 (1991)『自然言語の意味論』産業図書
- 田中穂積 (1989)『自然言語解析の基礎』産業図書

● **Evaluation**

In the first, second and third years, 100% for a research report on the topics of students' own research.

科 目 名	後期研究指導 Doctoral Thesis Guidance
担当教員	西村（にしむら） 美保（みほ）

● **演習概要 Course Description**

本講義は、イギリス文学で博士論文を執筆することを目指す大学院生（博士後期課程に在籍）に研究指導を行うことを目的とする。19 世紀を中心として、イギリス文学史とその文化的コンテクストについて講義する。その一方で、文学用語や理論、文学テキストの多様な批評を読んでいくことで、研究の切り口や手法の視野を広げる。

● **学修到達目標 Main Goals of Course**

（1）それぞれの博士論文のテーマに従って研究方法を確認し、研究計画を立てる。
（2）先行研究を調査し、博士論文のテーマに従ってまとめる。
（3）先行研究を踏まえ、独自の論を構築する。自分の論をサポートするものを明確にする。
（4）博士論文の構想を図式化する。
（5）博士論文のテーマに従い、学会発表を行い、学会紀要等へ投稿する論文を執筆する。
（6）博士論文を章ごとに順次執筆する。

● **演習計画 Course Schedule**

授業は、「スクーリング」と呼ばれる授業への出席と所定のレポートの提出(添削と及びその改訂などを含む)によって構成される。「スクーリング」は 1 年生と 2 年生では年間 16 コマ、3 年生は年間 8 コマの授業から構成される。受講生は担当教員と相談し、年間を通じてもっとも適切なスケジュールを立てることになる。

それぞれのスクーリングで扱う内容については、指導教員からその都度指示がある。受講生は指示に従って教材に指定された文献を読み、また、博士論文執筆に必要な研究計画を立て、博士論文を執筆することになる。

● **課題レポート: Research Report**

受講生は 1 年目と 2 年目に行った研究について、その成果をそれぞれ課題レポートとして提出する。課題レポートの形式、分量などは別途指示する。課題レポートは大学院事務室に、それぞれの年度の 1 月末までに提出し、指導教員の指導を受けなくてはならない。

2 年目、3 年目の研究成果について：Requirements in the second and third years

受講生は 2 年目あるいは 3 年目に、担当教員の助言のもとで、全国大会レベルの学会で研究成果を発表しなくてはならない。どの学会で発表するかは指導教員と事前に相談して決める。発表した研究成果はいずれかの学内紀要あるいは学会紀要に投稿しなければならない。

● **事前事後学習**

受講者は担当教員の指示に従って博士論文を作成することになる。基本的にスクーリング時

に、進行状況に合わせて次の指示をすることになるが、スクーリング以外でも出来上がった章から担当教員にファイルを送り、指導を受けることが望ましい。

● **参考資料**

Abrams, M. H. & Geoffrey Galt Harpham, A Glossary of Literary Terms. (Stamford: Cengage Learning, 2015)
Guerin, Wilfred L. , Earle Labor, Lee Morgan, Jeanne C. Reesman, John R. Willingham, *A Handbook of Critical Approaches to Literature*.　(Oxford: Oxford University Press, 1992.)
Klarer, Mario.　*An Introduction to Literary Studies*.　New York: Routledge, 2024.
Peters, Laura *Orphan Texts: Victorian Orphans, Culture and Empire.*
(Manchester: Manchester University Press, 2000)
Stone, Pamela K. & Lise Shapiro Sanders.　*Bodies and Lives in Victorian England: Science, Sexuality, and the Affliction of Being Female*.　London and New York: Routledge, 2021.

テリー・イーグルトン、『文学とは何か　現代批評理論への招待』(上)・(下)大橋洋一　訳、岩波文庫、2018
ジョナサン・カラー、『文学理論』荒木映子・富山太佳夫、岩波書店、2003
フランク・レントリッキア、トマス・マクローリン、『現代批評理論　22 の基本概念』大橋洋一他訳、平凡社、1994
その他詳しくは指導の中で紹介する。

● **成績評価方法**

博士論文の評価は主査(担当教員)及び複数名の副査による最終試験(口頭試問を含む)による。

科 目 名	後期研究指導 Seminar
担当教員	浦野　研

● **演習概要 Course Description**

この講義は博士後期課程の英語教育学の分野で博士論文を執筆することを目指す大学院生に研究指導を行うことを目的とします。受講生は本学大学院規定に従い、3 年後に博士論文を提出し、博士号を取得することを目指します。

● **学修到達目標 Main Goals of Course**

(1) それぞれの博士論文のテーマに従って研究方法を確認し、研究計画を立てる。
(2) 先行研究を調査し、博士論文のテーマに従ってまとめる。
(3) 研究計画に従ってデータを収集・解析する。
(4) データの解析結果をまとめ考察を深める。
(5) 博士論文のテーマに従って、学会発表を行い、学会紀要等へ投稿する論文を執筆する。
(6) 博士論文を章ごとに順次執筆する。

● **演習計画 Course Schedule**

授業は、「スクーリング」と呼ばれる授業への出席と所定のレポートの提出(添削と及びその改訂などを含む)によって構成されます。「スクーリング」は 1 年生と 2 年生では年間 16 コマ、3 年生は年間 8 コマの授業から構成されます。受講生は担当教員と相談し、年間を通じてもっとも適切なスケジュールを立ててください。

それぞれのスクーリングで扱う内容については、指導教員からその都度指示があります。受講生は指示に従って教材に指定された文献を読み、また、博士論文執筆に必要な研究計画を立て、博士論文を執筆します。

課題レポート:Research Report

受講生は 1 年目と 2 年目に行った研究について、その成果をそれぞれ課題レポートとして提出してください。課題レポートの形式、分量などは別途指示します。課題レポートはそれぞれの年度の 1 月末までに提出し、指導教員の指導を受けてください。

2 年目、3 年目の研究成果について:Requirements in the second and third years

受講生は 2 年目あるいは 3 年目に、担当教員の助言のもとで、全国大会レベルの学会で研究成果を発表してください。どの学会で発表するかは指導教員と事前に相談して決めてください。発表した研究成果はいずれかの学内紀要あるいは学会機関誌等に投稿しなければなりません。

● **課題図書**

(1) 研究の方法論について

- 浦野研・亘理陽一・田中武夫・藤田卓郎・髙木亜希子・酒井英樹. (2016).『はじめての英語教育研究: 押さえておきたいコツとポイント』. 東京: 研究社.
- 竹内理・水本篤（編). (2023).『外国語教育研究ハンドブック: 研究手法のより良い理解のために【増補版】』. 松柏社.

(2) 英語教育学全般について

- Doughty, C. J., & Long, M. H. (2003). *The handbook of second language acquisition.* Wiley-Blackwell
- Long, M. H., & Doughty, C. J. (Eds.) (2009). *The handbook of language teaching.* Wiley-Blackwell

(3) 専門分野の領域

それぞれの受講生の専門領域の文献については、受講生の博士論文のテーマに合わせて、指導教員と相談の上、図書・論文などを含めて、読むべき文献を決めていきます。

● 事前事後学習

受講者は担当教員の指示に従って博士論文を作成することになります。基本的にスクーリング時に、進行状況に合わせて次の指示をすることになりますが、スクーリング以外でも出来上がった章から担当教員にファイルを送り、指導を受けてください。

● 参考文献

それぞれの博士論文のテーマに従って適宜指示します。

● 成績評価方法

博士論文の評価は主査(担当教員)および外部審査員 1 名を含む 3～4 名の副査による最終試験(口頭試問を含む)によります。